

# 富山弁で歌うラブソング



①

富山では、多くの若者が進学や就職に伴って県外に出ていく。とりわけ女性人口は20歳代で落ち込む。しかし、嘆いてばかりいるのは間違いだ。富山には都会から戻って新しい仕事を成功させたり、家業を発展させたりした20、30歳代の女性たちがいる。新たな年を迎え、それぞれの道で輝きを放つ彼女たちの生き方を紹介する。

## 東京へ募る思い

好きやちゃ 好きやちゃ  
好きやちゅがー。 「あいのかぜ」は、すべて富山弁で歌うラブソングだ。作詞・作曲したのは射水市出身のシンガー・ソングライター水越ユカさん(28)。東京を拠点に活動し、富山でもステージに立つ。

物心がついた時から、歌手になりたかった。中学時代は作詞しては友達に見せ、卒業する先輩のために曲を作った。夢をかなえる場所と決めていたのは東京。「早く上京しないと」。高校時代はもどかしさを抱えながら過ごした。

## デビューへの道

高校3年だった2006年夏、東京で大手音楽レーベルが歌手養成コースのオーディションを開くことを知り、迷わず応募した。中学時代に初めて作った曲を歌い、7次にわたる審査を勝ち抜いて3人の特待生の1人に選ばれ

シンガー・ソングライター  
水越 ユカ さん 28 (射水市出身)

## 東京してかなえた夢 地元への思い込めて

換え、計約4時間の長旅。それでも「東京への片道切符に胸が高鳴った」。

養成所では毎日、朝から日が暮れるまで発声やダンスを習い、1人でいるときは自作曲を書きためた。2年間の養成コースを修了する頃、デビューを打診されたが、ずっと夢だった自作曲を歌うことは認められなかった。

デビューを断って路上で自作曲を歌う道を選び、渋谷の街頭に毎晩のように立った。自主制作したCDを2年間で1万枚売るなど地道な活動を続けるうち、別のレコード会社の目に留まり、11年にシングルCD「In the room」で全国デビューを果たした。

## 富山との隔たり

歌手として軌道に乗り始めた13年3月、渋谷でワンマンライブがあった。300人の熱気に包まれながら、ふと、思った。この中に家族や富山の友達はいない。「富山の人に、歌手になった自分を見てもらえたらいいな」

このライブの翌月、活動5年目を迎えた節目に、富山での音楽活動を本格的に始め、花火大会や祭りのステージに立った。故郷の観客と一体感を味わえることを期待していたが、どこか隔たりを感じ

の間にか標準語になってしまった。富山弁で歌えば自分の気持ちが素直に伝わるんじゃないか。射水、海王丸パーク、恋人の聖地。次々に浮かぶイメージから一気に書き上げたのが「あいのかぜ」だ。

## つながる気持ち

11月、「海王丸ミュージックフェス」で初披露すると、自然と手拍子が湧き上がり、温かい拍手に一体感を覚えた。「やっと気持ちがつながった」。インターネット動画サービスのユーチューブに「あいのかぜ」を載せると、1週間に1万回再生されるほど反響を呼んだ。ネットでは「富山弁はかわいい」と話題になった。

「あいのかぜ」を契機に、富山との関わりは深まった。昨年8月には趣味のスポーツを生かして海王丸パークを発着点に100キロを走破するサイクリングイベントを成功させ、11月には魚津市で全国大会が行われている大学女子野球の公式テーマソングを発売した。「あいのかぜは、私にしかできないことは何なのかを教えてください」

活動の幅を大きく広げてくれた故郷・富山。感謝と応援の気持ちを込め、15年3月に